

1 単元名 10年後の小呂島を守る

2 単元の目標

- 情報と情報の関係について様々な表し方があることを理解し、使うことができる。(知識及び技能)
- 文章を読んで理解したことや考えたことを、自分の知識や経験と結び付け、自分の考えを広げる。
(思考力・判断力・表現力等)
- 本単元の内容を自分事として捉え、実生活へ生かそうとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

3 単元について

(1) 教材観

情報機器が発展してきた現代において、メディアから得られる情報はテレビや新聞だけでなく、インターネット媒体によるものも多く、多種多様な意見で溢れている。大量な情報の中から精確な資料を読み解き、それに対して自分の意見を表出することは、必ず求められていく能力である。

評論文では、既習の説明文とは違って筆者の意見の分量が半分以上になっている。読者は筆者の意見を読み取るだけでなく、その意見に対する賛否を問われる内容であり、批判的な読み方を試される教材である。

また、筆者は読者を納得させるために、図表や写真、グラフや絵を用いている。説明文においても資料は効果的に使われていたが、自分の意見の説得力を高めるためにどのように資料を使うのか、という表され方は初めてである。自分の意見を、説得力をもって表出する際にも効果的な資料の使い方は必要であり、本教材はそのモデルとなるものでもある。

更に、既習内容である説明文「人間は他の星に住むことができるのか」、いずれ学習する論説文「動物園でできること」だけでなく、中学校三年生において学ぶ論説文「フロン規制の物語〈杞憂〉と〈転ばぬ先の杖〉のはざまで」「文殊の知恵」の時代」においても、地球を大切にすることや、今後の人間の活動が問われる内容が出てくる。文章を読んで理解したことや考えたことを、自分の知識や経験と結び付けることで、自分の考えを広げたり深めたりすることが求められるこれらの文章との繋がりが密であり、連動して考えることが本教材においても可能である。

このように、本教材を学習することは、筆者の意見を批判的に読み、説得力をもたせるための情報の使い方を学べるだけでなく、そのほかの単元との連動制から自分の考えを深化することができるものとなっている。

(2) 生徒観

本学級の生徒は、本学年に至るまでに自分の住んでいる地域、小呂島を活発化する目的に活動に参加している。小学校五年生から二年間では、小呂島の布教活動を島外の人々に向けて発信する「小呂島 PR 大作戦」を行っている。また、中学校一年生から二年間では、全国の離島とオンラインで交流し、比較することで、小呂島の良さに気付く「離島サミット」を行っている。

国語科の授業に対するアンケート調査では、「国語の学習は楽しい」「文章を書くとき、それが伝わるように書く」には最も肯定的な回答を行っている。一方で「みなで話し合うとき、自分から進んで話している」においては肯定感が下がっている。総合や道徳など、他の授業の発表においても自分の意見に対して自信をもっていない様子が見える。さらに、「学習したことを普段の生活でもいかせそうですか」の肯定感も低く、学んだことを自らの社会生活に生かそうとする態度は足りていない。

本単元を取り扱うことは、読者を納得させるための意見の表出のやり方としてのモデルになるだけでなく、学んだことを社会に生かそうとするきっかけにもなるものであり、大変意義深い。

(3) 指導観

本単元の指導にあたっては、まず「小呂島 RR 大作戦」「島内 SDGs 活動」「離島サミット」を想起させ、なぜこれらの活動を行ってきたかを考えさせる。そのうえで SDGs 活動に関する動画を視聴させ、SDGs 活動は小さなことから活動すること、物事を自分事として考えることが大切であることを捉えさせる。さらに、既習内容「人間は他の星に住むことができるのか」の結論部分「私たちはまず、「奇跡の星」地球を大切にしていけることがなにより重要です」に対する意見を思い出させ、単元間のつながりについて言及する。そのうえで、他の離島の人口減少や学校閉校の状況を踏まえ、10年後の小呂島を守るためにできることが何かを考えさせる。

次に、評論文「100年後の水を守る」の読解を行う。まずは既習内容である説明文とは違い、論説文は筆者の意見の読解が大切であること、それに対して批判的な読みが必要であり、自分の意見をどのようにもつかが問われることを説明する。特に本文後半の筆者の主張については、中学一年生の際の説明文「玄関扉」において学んだ「三角ロジック」が使われており、理由付けとして図表や写真、絵が用いられていることを捉えさせる。問いに対する答えや、筆者の主張、具体例をまとめた上で、結論部分「100年後の水を育む生活こそが、水問題の解決につながっていく」に着目させる。ここでは、「守る」と「育む」の意味を調べさせた上で、「育む」には手が加わっていることや、前向きな言葉であること、行動が必要であることを捉えさせる。

そして、筆者の意見に対して条件作文を書かせる。「節水を進めるために水の使用量に制限を設けるべきだ」と「水問題を解決するために最も重要なのは、水の再利用の技術開発だ」のどちらかの意見を選んだうえで、本文を振り返りながら賛否を述べさせる。その際、「頭括型」「尾括型」「双括型」について触れ、どの型で書くかを考えさせる。また、自分事として意見を表出させるために、理由には具体的な体験や見聞を取り上げさせ、説得力の高い文章にする。その具体的な内容については、何かを作るときに必要な水である「バーチャルウォーター」が身の回りにあるかどうかの視点を問い、より具体性を高めさせる。

最後に、本単元で学んだことを生かして canva でポスターを作成させ、本単元をまとめる。ポスターについては、資料の効果的な使い方を意識させたり、アンケートへのリンクを貼ったりすることで、実際に島民への啓発ができるものにする。その後、文章を読んで考えたことを踏まえ、どのように自分の知識や考えが広がったかをまとめさせる。まとめとして、今後の単元「複数の情報を関連付けて考えをまとめる」「動物園でできること」「論説文を書く」においても同じ流れを踏むため、その際にどのような行動化が出来たかを問うことを確認する。

(4) ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

有限性……地球上の水資源が有限であることを評論文を通して実感し、その深刻さに気付くこと。

連携性……地球の資源問題は将来を見据えた長期的な課題であることを理解し、人類全体の問題であることから、力を合わせる必要があること。

・本学習を通して育てたいESDの資質・能力

クリティカルシンキング（批判的に考える力）

筆者の意見に対して批判的に考え、自分の意見を表出すること。

システムズシンキング（多面的・総合的に考える力）

水問題から地球の問題に対して思考を波及させ、様々な教科や行動に落とし込むこと

・本学習で変容を促すESDの価値観

世代間の公正

資源の課題に対する努力を実感し、これから自分たちの世代でも行動していきたいと考えること。

自然環境・生態系の保全を重視する

これからの地球を守っていくためには、一歩ずつ自分たちが変わっていく必要があると考えること。

・達成が期待されるSDGs

1 1 住み続けられるまちづくりを

1 4 海の豊かさを守ろう

1 7 パートナリーシップで目標を達成しよう

4. 単元の評価規準

(ア)知識及び技能	(イ)思考力・判断力・表現力等	(ウ)主体的に学習に取り組む態度
① 文章と、図表や絵といった情報と情報との関係の様々な表し方を理解し、使うことができる。	① 筆者の表現の工夫を踏まえて、その内容を理解することができる。	① 進んで情報と情報を結び付けて内容を解釈し、学習課題にそって考えたことを文章にまとめようとしている。
② 筆者の意見を抽象化した上で自らの情報とし、具体的に活用することができる。	② 文章を読んで理解したことや考えたことを、自分の知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。	② 本単元の内容を自分事として捉え、意欲的に成果物を作成しようとしている。
		③ 本単元の学習後でも、実生活へ生かそうとしている。

5. 単元の指導計画（全6時間）

学習活動	○ 学習への支援	○評価 ・備考
1. 「10年後の小呂島を守る」ためにできることを考える。 ・今まで行ってきた活動「小呂島 PR 大作戦」「島内 SDGs 活動」「離島サミット」の意義 ・SDGs は小さな行動が大切であること ・10年後の小呂島の具体的なイメージをもつ ・10年後の小呂島を守るためにできることの見通しをもつ	○「小呂島 PR 大作戦」「島内 SDGs 活動」「離島サミット」の意義を考えさせ、それがあくまできっかけであることを捉えさせる。 ○既習内容「人間は他の星に住むことができるのか」の結論部分において、地球を大切にすることへの言及があり、今に至るまで何か行動してきたかどうかを問う。 ○「十年後の小呂島を守るためにできることはなにがあるか」を考えさせ、そのために本単元を学ぶことを伝える。	ウ② (主体的)
2・3 評論文「100年後の水を守る」を読解する。 ・評論文は説明文と違い、筆者の主張が述べられている ・主張の根拠として、文章だけでなく、具体例や数値、図表、写真、グラフや絵が効果的に用いられている。 ・結論「100年後の水を育む」と「守る」とのニュアンスの違いについて筆者の考えを踏まえながら考える。	○評論文は説明文とは違って筆者の意見を読み取るものであり、主張の根拠の読み取り方や、それに対する意見の表出が大切であることを説明する。 ○問いに対する答えが文章の半ばにあり、後半は筆者の主張であることを捉えさせる。 ○筆者の主張には「三角ロジック」が使われており、理由づけとして文章以外の情報も効果的に使われていることを捉えさせる。	ア①② (知・技) イ① (思判表)
4 筆者の意見に対して条件作文を書く。 ・AかBのどちらかの意見を選ぶ。 A「節水を進めるために水の使用量に制限を設けるべきだ。」 B「水問題を解決するために最も重要なのは、水の再利用の技術開発だ。」 ・上記の意見に対して賛成か反対かを理由とともに書く。	○「頭括型」「尾括型」「双括型」を最初にとらえさせる。 ○理由には、具体的な体験や見聞を取り上げさせることで、説得力の高い意見文になることを確認させる。 ○筆者の意見に対して賛否することが批判的な読解の起点であることを捉えさせる。 ○自分の考えを広げるために、身のまわりにある「バーチャルウォーター」すなわち何かを作るときに必要な水について問う。	イ② (思判表) ウ① (主体的)

5 canva でポスターを作成し, 本単元をまとめる。 ・タイトルとメッセージを載せる ・アンケートへのリンクを貼る ・単元の振り返りと自己評価を行う	○本単元で学んだことを生かし, 資料の効果的な使い方を意識させる。 ○文章を読んで考えたことを踏まえて, どのように自分の知識や考えが広がったかをまとめさせる。 ○今後の単元「複数の情報を関連付けて考えをまとめる」「動物園でできること」「論説文を書く」においても本時と同様の流れを踏み, 行動化を促すことを確認する。	ウ②③ (主体的)
---	---	----------------------

資料 1. 実際に生徒が作成したポスター



資料 2. 今後の教材における繋がり

教材名 1 「複数の情報を関連付けて考えをまとめる」

学習活動	○教材同士をつなぐ支援
1. 「共生社会に関するデータ」を読み、共生社会の実現に向けた課題について気づいたことをまとめる。 2. 「自立とは『依存先を増やすこと』」を読み、筆者の考えを整理する。 3. 上記の二つの資料を関連付けて、共生社会の実現に向けて大切だと思うことをまとめる。	○第一時において、共生社会の具体的なイメージをもたせるために、島における産業と島民の繋がりに触れる。また、島を守るために具体的にどのような意識をもってきたかを問う。 ○第三時において、小呂島でできることを改めて考え、それぞれの繋がりや、小さな行動が大切であることを改めて深める。

教材名 2 論説文「動物園でできること」

学習活動	○教材同士をつなぐ支援
1. 「動物園でできることを」を読み、動物園の役割についてまとめる。 2. 結論「その学びが、野生動物と私たちがこの地球上でともに幸せに生きる道をひらく力になると私は信じている」について、本文中の具体的な事例と結び付けて説明する。 3. 動物園のあり方に関する筆者の主張について、自分の知識や経験と関連付けて考えたことをまとめる。	○第一時において、「動物園でできること」が何かを問う際に、動物が自然界に位置するもので、既習内容と繋がっていないかどうかを問う。また、論説文としての読み方 ○第三時において、自分の知識や経験と関連付ける際に、論説文「100年後の水を守る」のことを振り返らせ、まとめの方法を考えさせる。

教材名 3 論説文を書く「構成を工夫して考えを伝える」

学習活動	○教材同士をつなぐ支援
1. 社会生活におけるできごとや問題について、取り上げる課題を決め、自分の考えを三角ロジックでまとめる。 2. 考えを組み立てて論説文を書く。 ※頭括型・尾括型・双括型 3. 論説文を発表する。	○取り上げる課題を何にするか、こちらから誘導することなく、小呂島の問題がでてくるかどうかを確認する。

6. 成果と課題

本実践は、中学校国語科における論説文と ESD を紐づけることと、一つの教科内で一年間を通して ESD を行うこと、を目的とした。

ESD は他者への発信を目的とした活動が重要であり、国語科において実践する場合、評価項目「話すこと・聞くこと」「書くこと」が活動に見合った単元内容になる。教科書においても「話すこと・聞くこと」「書くこと」の重要度は上がっており、交流活動が増えている一方で、説明文・論説文として依然学習内容にある。特に論説文は筆者の意見に対する批判的な読み方を問われるものであり、ESD と深く関わる単元であるが、内容が決まったものであることからどのように ESD に結び付けるかが難しい。そこで本実践では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」を含め、一年間を通して ESD の視点をもった構想を作ること、論説文で問われる批判的な読み方を繋げられるかどうかを行った。

成果については、論説文であっても、第一次にきっかけの授業、最後に対外的な創作活動を一時間ずつ挟むだけで、一つの教科内で一年間を通して ESD 活動を行えただけでなく、他教科との横断性を含めたカリキュラムマネジメントへの繋がりをもてた。第一次に地域の特性や課題を踏まえることによって、論説文での本文内容への理解が素早くなるだけでなく、次の論説文「動物園でできること」でも、導入や最後のまとめにおいて、地域の特性や課題に繋げることができていた。更に、「書くこと」の単元において、題材は生徒自身の身近な疑問から取り上げる。こちらが誘導することなく、その身近な疑問に地域の課題を結びつけた論説文を書くことができていた。加えて、総合を含めた他の教科でも地域の特性や課題を扱う場面があったが、「国語の授業で扱った」という発言が出てきており、カリキュラムマネジメントにも

繋がっていることがわかった。

課題については、まずは外部への意見交流機会を更に多くすべきだったことが挙げられる。論説文が「話すこと・聞くこと」「書くこと」に対して ESD との紐づけにくいのは、ESD において重要な外部との交流活動がやりにくい点にある。本実践においてもそれは分かっていたためにポスターを作製したが、それを発表したり交流したりする場をもっと明確に用意することがより好ましかった。したがって、本単元でのまとめを別の単元「プレゼンテーション」等で行い、その発表を外部と交流できる場で設けるべきであった。更に、一年間を通した ESD の視点を見とるにはもっと学年の最初の段階からきっかけを投げかけておくべきであったこと、が挙げられる。本実践では中学二年生を対象としており、筆者の説明を読み取る説明文から、筆者の意見に対して批判的な読み方を試される論説文へ移行する時期である。論説文になった段階で、地域の特性や課題と結びつけるきっかけを投げたが、その時点で一年間の半分が過ぎている状態だった。一年間の後半の単元で ESD と結び付けることは出来たものの、単元数にすると少ない。説明文の段階からきっかけを与えておき、他教科を含め地域のことへの考えを深化してもらい、論説文の単元に入ってからそれを表出してもらい、という流れの方がより確実に ESD との結びつきが見られるだろう。